# 風の旅人　他者を探し求める旅路の果てに

平松　虹太朗

τὸ πνεῦμα ὅπου θέλει πνεῖ καὶ τὴν φωνὴν αὐτοῦ ἀκούεις, ἀλλ' οὐκ οἶδας πόθεν ἔρχεται καὶ ποῦ ὑπάγει· οὕτως ἐστὶν πᾶς ὁ γεγεννημένος ἐκ τοῦ πνεύματος.

二〇〇七年に宮本先生が東京大学を定年で退官され、上智大学神学部に移られた時、私は学部の二期生であった。その頃の私は学問にさほど関心を持っておらず、初めて宮本先生の授業を受講したのも、単に必修科目だったからという消極的な理由であった。当然当時の私には、先生の語る「エヒイェロギア」や「食卓協働態」といった言葉の意味を理解できるはずもなく、それらの言葉との出会いは挨拶程度で終わってしまった。

だがそれから三年ほど経ったある日、私は再びこれらの言葉たちと出会うことになったのである。その頃の私は修士課程での勉強を志しており、どの先生に師事するかで思い悩んでいた。そんな折、宮本先生がいいのではという友人の勧めで、先生の研究室を訪ねたのである。結果、この訪問が先生の言葉たちとの再会となった。そして大学院に進学後も、宮本先生には指導教官として面倒を見ていただき、この数年の間、様々な形でその言葉を見聞きする機会を得たのである。

先生の思想は、単にその著作や授業だけでなく、日々のなにげない会話、特に食事の場での会話を通して学ぶことが多かった。テクノロジーが発達し、情報伝達の手段が多様化したこの時代においても、依然として人の思想の核心を伝える最良の手段は口伝なのだろう。なぜなら、言葉というものは語られた瞬間から、「語られたもの」となり、その生命力を徐々に失っていくからである。それはまるで抜け落ちた髪の毛のようなものである。ひとたび頭から抜け落ちた髪は、もはや私とは何の関係もないものと感じないだろうか。言葉もまた同じようなものであり、ひとたび言葉が発せられると、その瞬間から言葉は発話者から離れ、緩やかに死へと向かうのである。それゆえ、一子相伝の奥義継承のような大げさなものではないけれど、ある人の思

想を学ぶにあたり、その人が発する言葉の誕生と死の狭間に立ち会うことは、書物を通して触れるよりも一層リアリティを持った言葉を共有するかけがえのない「時」なのである。

この口伝の最良の場（時）、その一つが食事の席である。宮本先生曰く、「食は、人間的生命の普遍的交流の場であり、また根源的な生命力に感謝する祭礼でもあり、また生死をかけて闘争する根源悪の場面でもあり、また文化や善や義の徳を創造する場でもある。その意味で、食は人間の生死の問いや他者との出会いの場、文化創造の場・トポス[1]」なのである。

先生との食事の席では、くだらない雑談から哲学的問題に至るまで様々な話題が持ち上がったが、この食のトポスにおいて、私は先生から何を学ぶことができたのだろうか。そのようなことを考えてながら先生の著作を紐解いていた折、ふと「風」というキーワードが浮かび上がってきた。『存在の季節』のむすびにおいて、先生は以下のように語っている。

> 今はハーヤーの季節である。四季の春夏秋冬は気によって分節化される。南風（はえ）や北風が季節を分節し、季節風も吹く。だから今はハーヤーの気節である。それはハーヤーが気において気を通して到来するということである。言いかえれば、そのハーヤーの到来的出来事や物語をひき起すのは「気（プネウマ）」であり、「気」によって「こと」も分節化され、気節を生ずる。こうして気はことに吹き入りそこに受胎し新しい事・言と成る。その意味で「こと」は気を蒙り受ける場であるともいえよう。[2]

また、タイトルに風の文字が冠されている『他者の風来』のあとがきでは、その表題の意味について、「他者が風（霊、気）に乗ってそれを通して霊機において到来するという意味である[3]」と語っている。この「風・気・霊」という語に対応するギリシャ語の「プネウマ」、そしてヘブライ語の「ルーアッハ」は、宮本哲学において「他者」の現出に必要不可欠な動因として位置づけられている。それゆえ、「他者」問題を最大の関心事項としている宮本哲学では、他者概念と密接な関係を持つ「風」という言葉もまた、その思想を象徴する一つのキーワードと言えるだろう。

では、この「風」に導かれて到来する「他者」とはいったいどのような存在なのだろうか。先生の他者論を理解するには、まずその土台となっているレヴィナスの思想を踏まえておく必要がある。レヴィナスは、フッサール現象学が提示した意識の志向性に内在する暴力的性格を明らかにし、超越論的主観の領域外に位置づけられる「他者」をその思索の出発点としている。そして、その思索の中で、〈語られたこと（le Dit）〉の持つ他者排除の自閉的な性格を暴露し、自分と異なる存在を排斥しようとする自己同一性を、自同性（le même）と呼んでいる。このようなレヴィナスの思索を受け、宮本先生は次のように述べている。

自同といっても、様々なレヴェルがある。生物学的個体から社会的個体、利益追求型集団やある文化、民族、国家などが挙げられよう。それらはみな自己の生体や組織・システム、同一の血縁性や価値観を自己同一の支点として自らと異なるもの、つまり異文化、異性、異民族、異なる価値観などを排除し解体するか、あるいは自らに同化できる限り同化するか、いずれかの論理を用いて自同性を貫徹するのである。したがって自同は全体主義的であるといえる。(4)

このように、〈語られたこと（le Dit）〉の持つ全体主義的性格は、人間生活の様々な領域において見出される。宮本先生はレヴィナスに倣い、その根柢に「存在－神－論」というイデオロギーの存在を、そしてかのアウシュヴィッツを筆頭とする諸々の根源悪の温床をそこに見出す。

この根源悪の問題は、決して私たちに関係のない過去の問題ではない。現代社会はいまだ存在－神－論のロジックによって支配されており、「他者」はいつ何時でも疎外と同化の危機に曝されているのである。先生によれば、現代における根源悪は、特にエコノ＝テクノ＝ビュロクラシーという巧妙で狡猾な機構によって引き起こされているという。この機構は、時に権力への意志に従い、他者の意味世界を、そしてその生命までをも踏みにじることがある。しかし私たちの大部分は、自らが疎外や同化されていることに気がつくことなく、仮初めの生を享受し、日々をただ流されるままに消化していくほかない。

では、このような権力が作り出した全体主義的自同性に回収されないためには、私たちはどのような生き方をすれ

ばいいのだろうか。宮本哲学ではそのような生き方を「旅人」と呼んでいる。

「旅人」とは、精神的・地理的・文化文明的・歴史社会的な様々な次元において、他者を排斥する圏域から脱在を試み、一期一会を希求する人格を意味する。その人格は、エヒイェを体現する者なのである。その性格は、エヒイェに基づき、自・他の共生・相生を求め、相生を実現できるような生命的な言葉や物語りを語る。例えば本書に現われる預言者などが、その典型をなすであろう。(5)

ここから分かるように、宮本先生の語る「旅人」とは、ある人格を表現する際の隠喩であるが、同時に、物理的移動としての「旅」自体も宮本哲学では重要な役割を担っている。先生はモーセ、イエス、パウロ、アウグスティヌス、シャルル・ド・フーコー、松尾芭蕉といった「旅人」たちの語りとその生き様の中に、真の人間性の現われを見出す。旅は人の本当の姿を映し出す鏡というわけだ。現代のように、安全がある程度保証されている時代の旅とは異なり、彼らの時代の旅は、常に死と隣り合わせの命がけのものであった。そのような旅の道程で、人は己の存在意義を問い、世界と対峙する機会を得、自身の内奥から湧き上がる言葉を書き記していったのである。そして、私たちがこのような「旅人」たちの著作を読み、古典という形で継承してきたという事実そのものが、人間にとって「旅人」であらんとすることの重要性を物語っているのではないだろうか。

また、このような物理的な圏域を脱する旅は、時に精神的、霊的な圏域へと人々を駆り立てることがある。ヨハネ福音書はこの精神的、霊的な旅を「風」と比して次のように語っている。

> 「あなたがたは新たに生まれねばならない」とあなたに言ったことに、驚いてはならない。風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くのかを知らない。霊から生まれた者も皆その通りである。（ヨハネ3・8）

見たとおり、このヨハネの一節には「旅人」という言葉

が直接出てはこない。だが、そのテクストの間(あわい)には旅人の存在が見え隠れしていると私は感じる。神の霊に息吹かれた人間は、ひとりの旅人として風のように神を探し求め、霊に導かれて荒れ野を放浪するのである。

このような旅人を宮本哲学では「エヒイェ的人格」と呼び、そのエヒイェ的人格によって拓かれる意味世界、言葉の紡ぎを総じて「エヒイェロギア」と名づけている。このエヒイェロギアこそ、古今東西の言葉の中を彷徨い歩いた旅人、宮本久雄が辿り着いたひとつの到達点と言えるだろう。だが、これは決して最終的な終着点ではない。というのも、一つの段階に達すると、また次の段階が始まるからである。先生はニュッサのグレゴリオスのエペクタシスについて語る際、その絶えざる「脱在」、無限の旅路について言及するが、先生の思想や生き方そのものが、この脱在の体現なのである。

風は一処(ひとところ)に留まることを知らない。常に自由である。風によって雲は運ばれ、葉は空を舞う。人もまた風によってその生の道行きを変えられることがある。霊風に身を任せ、言の葉を舞い散らす「風の旅人」、宮本先生とはそういう存在である。

註

（1）宮本久雄『存在の季節』知泉書館、二〇〇二年、二三二頁。
（2）同上、二七一頁。
（3）宮本久雄『他者の風来――ルーアッハ・プネウマ・気をめぐる思索』日本キリスト教団出版局、二〇一二年、二六五頁。
（4）同上、五三頁。
（5）宮本久雄『旅人の脱在論』創文社、二〇一一年、v頁。